

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	O470500315		
法人名	社会福祉法人キングス・ガーデン宮城		
事業所名	星谷ブランチ		
所在地	宮城県気仙沼市松崎面瀬17-1		
自己評価作成日	令和 2年	10月	31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和 2年	11月	20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

介護する、されるの色を極力出さないよう、生活を共にする家族のような関係性を築けるように接している。日常、生活で行う事(調理、食事準備、掃除、洗濯全般、)も必ず共に行っている。施設の敷地面積の広さを生かし、屋外行事や野菜、植物栽培に力を入れている。散歩も敷地内で十分にでき、道路に出なくても済むので環境的にも安全度が高い。屋外でバーベキューをした時などは窯で焼いたピザを近所の方におすそ分けしたりして、信頼関係を深めている。面瀬川沿いに立地しているが、嵩上げた土地と鉄筋の建物という災害に強い事も利用者とその家族から厚い信頼を得ている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、気仙沼市面瀬地区の閑静な山間部に囲まれた一角にあり、近くを面瀬川が流れている。コロナウイルス感染の影響で、各種行事の中止や外出する機会がない中、天気の良い日は、車いすの方も一緒に、ホームの周辺の散歩や中庭でバーベキューを実施し楽しんでいる。ホームでは、入居者の思いや生活歴を汲み取り、写経をしたり、縫物をしたり、家事の手伝い、好きなテレビを見るなど一人ひとりを尊重したケアに取り組んでいる。毎月の訪問診療や毎週来る訪問看護師による健康管理は、入居者や家族の安心に繋がっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 星谷ランチ)「ユニット名 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度初めに理念について職員全員から意見を徴収し、職員全員のアイデアが反映された理念を掲げ、それを事務所に掲示し、日々その理念のもと、ケアにあたっている。	今年5月に職員にアンケートを取り作成した。「個性を尊重…」など3項目の理念を毎朝ミーティングで確認している。料理の味付けや昔の歌など得意なこと、好きなことをするなど日々の実践に活かしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で今冬から接近した関係は途絶え気味であるが、敷地内の草刈り作業を共に行ったり、回覧板を利用者と一緒に回しに行ったりした。窓越しの挨拶もたまにしている。	面瀬地区ふれあい祭りに、折り紙を貼って作った着物やクラフトテープで作ったカバンを出展した。野外バーベキューで、窯で焼いたピザを近所におすす分けした。地域の方から柿の差し入れがあり干し柿を作った。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議時に認知症の方への対応方法などケアの事例報告を行った。施設見学や入所申込時に家族が困っている事で例を挙げアドバイスしたりもした。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ケアの事例を報告し、そのケア方法について意見を会議出席者全員から聞いた。職員も気づかなかった意見もあり、日々のケアに生かせる事もあった。	地域包括職員や民生委員、近所の方、家族、ボランティアの方々が参加している。コロナ禍で5月は、資料を書面で送付した。ホームの看取り状況や身体拘束、冬場の過ごし方について意見交換している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護保険の書類の送付先の確認の連絡を何度か行っている。地域包括支援センターからは入所相談の件等で連絡を取っている。	生活保護者の入居の受け入れについて、包括と話し合いをしている。市より、コロナ感染症対応として、運営推進会議の開催についてや消毒液、手袋は間に合うか等連絡を受けた。感染症の研修会に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会を実施し、拘束にあたる行為を皆で話し合った。身体拘束にたると思われる行為でも身の安全を守る為と本人と家族様から承諾を得て、それを行っている。定期的に評価しその行為の継続性を確認している。	身体拘束適正化委員会で、言葉での抑制や車椅子の行動を制限していないか等、日常の業務を振り返り、拘束のないケアに努めている。家に帰りたいと言う方は、一緒に散歩や家族に電話し、本人と話しってもらう等対応した。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての研修会を設け、虐待行為の対象となるものを理解しあった。言葉が荒くなりそうな時は職員同士で注意し合った。	ホームの研修会で、心理的や性的、経済的などの虐待を学んでいる。忙しい時など行動を制限したり、強い口調など適切でない声掛けや行動対応をその都度注意しあい確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	深く勉強する機会はなかったが、今後、そういった方が入居する可能性はあるので勉強する機会は作っていききたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規契約は無かったが、今年度から一部加算に変更があり、家族様へ電話と書面で説明し、同意を得ている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に出席できる家族様にはその場で希望、要望を徴収している。それ以外の家族には何らかの連絡をした際に要望を聞くようにしている。	運営推進会議に出席した家族より、コロナ禍のため頻りに面会が出来ない。玄関前で面会出来ることや電話連絡、毎月の手紙や写真で元気な姿が分かる等の意見を貰った。家族懇親会をホームで開催した。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の職員ミーティング時に職員個々から意見を聞くようにしている。代表者へは月1回の管理者及び職員が面接する機会があり、その時に意見を述べている。	職員からの提案や要望は、いつでも代表や管理者に伝えられる。コロナ禍の影響で、入手困難な使い捨て手袋の購入や古くなった調理用の器材等、職員の提案で実現している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	業務に支障がない程度に希望休や有給休暇を取れるようにしている。サービス残業にならないよう、時間外手当の申請は必ず出すようにしている。必要な物はなるべくすぐに購入できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナの影響で外部研修は減った。管理者主導にならないよう、施設内行事を介護職員に一任した。介護保険の仕組みの理解度を上げる為、管理者が行っている事を手伝ってもらったりした。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの影響で毎年行われていた同業者との研修会はまだ行われていない。別の施設に知人がいるといった職員は互いに施設での取り組みや対応方法等話し合っている。	毎月、気仙沼市内の同法人会議に管理者が出席している。近況報告や事業所同士のコロナ対応などの情報交換をしている。職員も他事業所の介護職員と行事やケアの取り組みについて話し合いをしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	約一年半、新規利用は無くそのような機会は無いが、入所する時は必ず本人と面会し、家族を交えニーズを抽出していた。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	同上		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その方の現況、入所後予想される状態を推測し、家族に状態変化後の希望等を聞くようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活で本人ができそうな事は一緒にやってもらうようにしている。食事もおやつも同じ時間、同じ空間で平等に行っている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	何かあれば家族に相談するようにしている。定期通院はできれば家族にお願いしている。コロナの影響で長期間できていないが、行事の時は家族に連絡し、出席を促した。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響により、人と接触する機会は激減したが、ドライブに出掛けた時は利用者の生まれ育った場所や懐かしい場所などお見せるようにした。	コロナ禍の影響で、面会は1階ホールで2メートル以上の間隔をとっている。馴染みの美容院に行く方や自宅近くの神社にドライブするなど支援をしている。入居者同士世間話をしたり楽しく過ごしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	特に努力したという訳ではないが、入居者全員が数名の話し相手を持っており、孤立している方はいない。誰か一人が何かをしていると自然とそこに人が集まっていく傾向もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	この一年半退去した方はいない。以前退所した方は施設で亡くなった方が大半であり、たまにその家族さんと街などであった時は挨拶を交わしたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分で明確に伝えられる方は定期的話し合いを設けているが、うまく言葉で言い表せない方は日々の会話の中からヒントを得てその方がどういう暮らしをしたいのか考えている。	戦争に行きシベリアに抑留され、苦勞したことや水産加工を經營し忙しかったことなど、昔話を傾聴している。居室でテレビを見たい方は、家族に伝え設置した。把握困難な方は、表情や行動から判断している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の調査で生活歴を聞き取っている。入所後も会話の中から発見したことを、面会時や電話連絡時に確認した。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人個人の身体機能、精神状況、嗜好の観察と評価を随時行っている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	課題は計画作成担当以外に職員ミーティング以外に職員が記録する毎日のケースや引継ぎノートに書かれた事から抽出し、暫定計画を家族に相談し了承を得てから本プランを作成している。	家族の「今の食事形態で喉に痞えないように様子を見てほしい」や「転ばないように生活してほしい」などの要望で、かかりつけ医の意見を取り入れた介護計画を作成している。3か月毎に見直し、家族の同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	26と同様でケース記録の他、引継ぎノートを等も活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	遠方に住まわれている家族に代わって各種申請手続きを代行している。オムツ類の購入も家族に代わって行っている。通院付き添いは原則家族が行う事になっているが、難しい場合は施設で付き添っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	生活に必要なスーパーマーケット、理美容室は近くのものを利用しているが、立地的に車両がないと行動範囲が狭くなってしまいが現状である。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の希望で法人の嘱託医である医師を主治医としている方がほとんどである。訪問看護ステーションとも連携しており、ちょっとした事でもすぐに適切な処置が受けられている。	1名の方が、かかりつけ医を家族対応で受診している。他の方は、嘱託医の月1回の訪問診療があり、状態の変化時に相談や指示を貰い、安心した医療体制がある。歯科医が随時訪問診療を行っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	一週間に一度訪問看護師が来所し、利用者の変った事や気になる事を相談している。医療的な処置が必要と思われた場合は看護師から主治医への連絡体制も整っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院となると3年以上無いが、そうなった場合、主治医、病棟、地域医療連携室と治療や退院に向けての話し合いは過去に例外なく行われてきた。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時におおまかに終末期の意向を家族に聞いている。状態が変化する毎に家族へ方向性を確認し施設のビジョンを説明し、同意を得るようにした。	重度化対応・終末期ケア対応指針に、ホームの基本的な姿勢や主治医・訪問看護師との連携など表記されている。食事がとれなくなった場合などに、今後の対応について、主治医が家族に伝えている。希望があれば終末期ケアを実施している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生、急変時の対応方法を施設内研修で再確認している。法人内で実施される研修会にも参加するようにしている。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害の種類によって職員がどう行動すべきか定期的に話し合うようにしている。運営推進会議で災害時に協力をもらえるようお願いし、同意をいただいている。	夜間想定を含む避難訓練を年2回実施している。近所の方が、見守り誘導している。近所の方々がすぐ駆け付けられるように、外にも聞こえるスピーカの設置や車いす対応の避難経路の整備など、課題としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	家族のように接しながらも年上として敬意をもった声掛けを行うようにしている。	名前は「さん」付けで呼んでいる。失敗時は周りの方に気付かれないように、居室に誘導し尊厳やプライバシーにも配慮している。外出時は、ファンデーションや口紅を塗り、着慣れた半天姿で出かける方もいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分の好きなように生活してもらおうようにしている。家事手伝いはこちらから促すだけでなく本人の自主性に任せる時の方が多い。自分のやりたいことが表わせるように会話する機会を多く設けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	常にそういった概念は持たず、個人のペースを優先するようにしている。コロナ禍で外出希望は思うようになえられなかったのが残念であった。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服は自分で選べる方は本人に任せている。化粧水、乳液等も無くならないよう家族もしくは職員が調達するようにしている。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の段階からできる方には大いに手伝ってもらおうようにしている。昔ながらの料理の味付け等、職員より利用者が味付けた物がうまかったりする事も少なくはない。片付けも一緒に行っている。	献立作成や調理は、担当職員が行っている。肉や餡物など甘い物を好む方が多い。敬老会には、同法人の厨房に依頼し折詰弁当を食べた。おはぎ、ホットケーキ、チョコレートパフェ等一緒に作り食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者個々の自適量を見極め、食べ過ぎたり、足りなかったりする事がないようにしている。水分も1日最低1000mlを目標にしているが、持病がある方には調整するようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアをしている。義歯の方がほとんどである為、嵌り具合など観察し、調子が悪いと思われた時には歯科通院(訪問もあり)を検討し、対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ交換の方は定時に交換するようにしている。それ以外の方は尿意も保たれており、自発的にトイレに行くが、一人で行けなかったりするので介助するようにしている。	日中、自力でトイレに行く方4名で、他の方は、車いす介助や落ち着きがなくなる等サインを把握し、トイレ誘導をしている。自立に向けた支援で、おむつからリハパンに改善した方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝は牛乳、おやつにははちみつヨーグルトを提供したり食事は便通に効果のある食物をメニューに取り入れている。下剤に頼る傾向が強いので、そこはもう少し考えていく必要がある。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	時間は14時～16時頃に入浴する方がほとんどである。以前は就寝前に入浴していた方もいたが、最近は拘りが無くなったようである。希望があれば対応できる体制は作っている。	一番風呂や熱めなど本人の希望に沿って、週2～3回の入浴である。入浴嫌いな方は、無理強いないで翌日等に変更している。昔の話をしたり懐メロを歌って入浴する方もいる。冬至にゆず湯を楽しんだ。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自分で休息できる方は半分以上いる。それ以外の方は様子を見ながら休息を促している。天気の良い日は布団を干したり、マメに寝具類を交換し、気持ちよい環境で眠ってもらうように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書は職員全員が一通り読むようにしている。新処方の方は服用後の様子観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者個々の得意な事や好きな事が日常できるように考えている。多いのは裁縫、食材の下ごしらえである。草むしりが好きな方もおり、暖かい時期は外に出て草取りを行った。男性の方は女性と比べ活動幅が少ないのが残念である。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本来であれば、食材の買い出しなど週に3回は出掛けていた機会も今年度はコロナの影響で消滅してしまった。職員とは少人数でのドライブ、家族様とは通院と美容室へ出掛けたくらいであった。	コロナ感染の流行に伴い、外部との接触を極力減らす中、天気の良い日は、車いすの方も一緒に施設周辺の散歩や植物などに水遣りを行っている。中庭でバーベキューを実施し、おにぎりやピザを一緒に作って食べた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理できる人の大体は持っているだけで安心という御守りの価値を持った方が多い。少数派であるが、欲しい物を指定し職員に頼む方もいる。自分で目的があって買い物に行きたいといった方は残念ながらおらず。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の都合などで面会頻度の少ない方は定期的に電話で話されるよう取り計らっている。短めの文章であったが、手紙を書いた方も少数いた。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	特に力を入れて工夫している訳ではないが、眩しければカーテンを下ろしたり、エアコンだけでなく換気も兼ねて外の爽やかな風を入れたりした。季節によって花を飾るのは以前からで、最近は季節を感じる置物を飾ったりしている。	ホールは、換気や温湿度が管理されている。敬老会や芋煮会の行事の写真を飾り、胡蝶蘭の花が季節を感じる。テレビを見たり、好きな写経をしたり、縫物や足上げ体操をしたり、思い思いに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う方は席も隣り合わせにしたり、行事の時なども一緒にお手伝いできるように配慮している。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の希望もだが、身体能力に合わせて動きやすい安全な環境を第一にしている。飾りたいものは本人の自由にしている。気分転換に芳香剤を置いたりもしている。	使い慣れたベッド、テレビ、ラジオ、衣装ケースや位牌が置かれている。家族の写真や自作の絵を飾り、声を発するぬいぐるみが置かれている。本を読んだりテレビを見たりゆっくり寛ぎ居心地よく過ごしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	1年半入退去がなく、利用者のほとんどが自分の部屋、共有ホール、トイレ、浴室、スタッフルームなど施設内部のおおまかな場所を理解できている。トイレの場所を分かりやすくした貼り紙も今は必要ないくらいである。		